

聖書日課 『からし種』 2023.4.30-5.7

<p>4月30日 (日) Ⅱサム 13章</p>	<p>「どうか妹のタマルをよこしてください。目の前でレビボット(『心』という菓子)を二つ作らせます」(6節)。レビボットと呼ばれている菓子は今でもイスラエルにあるようだが、この菓子の名に「心」の意味があることに、経緯を見つめられる主の静かな嘆き、叫びが聞こえるように思う。この日、まさに小さなタマルの「レビボット」は踏み散らされてしまったのである。</p>
<p>5月1日 (月) Ⅱサム 14章</p>	<p>「神は、追放された者が神からも追放されたままになることをお望みになりません。そうならないように取り計らってください」(14節)。ヨアブの不気味な工作に使われた女の作り話の中に、不思議と真実が語られていた。この数百年後、イエス・キリストが来られて、人々から追放された者たちを神のもとに引き寄せてくださることになる。</p>
<p>2日 (火) Ⅱサム 15章</p>	<p>「その地全体が大声をあげて泣く中を、兵士全員が通って行った。王はキドロンの谷を渡り、兵士も全員荒れ野に向かう道を進んだ」(23節)。「その地」が泣いたのは、王の都落ちを悲しむだけではないだろう。神の民であるわれらの間に、なぜ争いが絶えないのか。慟哭に送られてダビデが渡るキドロンの谷は、のちに主イエスも引き渡される夜に渡ることになる。</p>
<p>3日 (水) Ⅱサム 16章</p>	<p>「主がわたしの苦しみを御覧になり、今日の彼の呪いに代えて幸いを返してくださるかもしれない」(12節)。「サウル家のすべての血を流した」(8節)のはおまえだ！という、筋違いなシムイの呪いまでも、ダビデは主の前で心を開き、すべてみこころとして受け容れた。その中で、主が憐れんでくださるかもしれないという希望が起こされてきたのだろう。</p>

聖書日課 『からし種』 2023.4.30-5.7

<p>4日 (木)</p> <p>Ⅱサム 17章</p>	<p>「王は同行していた兵士全員と共に、直ちにヨルダンを渡った。夜明けの光が射すころには、ヨルダンを渡れずに残された者は一人もいなかった」(22節)。夜の闇に紛れてヨルダンを渡り切るまで、疲れた者に他の者が手を差し伸べ、恐れる者を他の者が励ましながら進む光景が目に見え、全ての者が救われて見上げる夜明けの光の美しさも。</p>
<p>5日 (金)</p> <p>Ⅱサム 18章</p>	<p>「たとえこの手のひらに銀千枚の重みを感じるとしても、王子をこの手にかけたりはしません。王があなたとアビシャイ、イタイに、若者アブサロムを守れ、と命じられたのを我々は耳にしました」(12節)。名も無きひとりの兵が、仲間の兵たちを代表して真実をまっすぐに告げた。その傍らに主がおられたのだろう、策略に長けた將軍ヨアブも強要はできなかった。</p>
<p>6日 (土)</p> <p>Ⅱサム 19章</p>	<p>「その日兵士たちは、戦場を脱走して来たことを恥じる兵士が忍び込むようにして、こっそりと町に入った」(4節)。この兵士たちの心境こそむしろ自然ではなかろうか。多くの人を巻き込んで父と子が戦い、子が殺されたのが何の勝利なのか。「もしこの日に、お前も平和への道をわきまえていたなら…。しかし今は、それがお前には見えない」(ルカ19:42)</p>
<p>7日 (日)</p> <p>Ⅱサム 20章</p>	<p>「わたしはイスラエルの中で平和を望む忠実な者の一人です」「何故、あなたは主の嗣業を呑み尽くそうとなさるのですか」(19節)。サウル家とダビデ家の王位を巡る争いに多くの人々と兵士が巻き込まれ、昨日まで「友」だったはずの者同士が今日「敵対」させられていく。しかし、一人の「平和を望む忠実な女」の一言が、一つの町を無益な滅びから救った。</p>